

明治十年前後

淡島寒月

明治十年前後の小説界について、思い出す  
ままをお話してみるが、震災のため蔵書も何  
も焼き払ってしまったので、詳しいことや特  
に年代の如きは、あまり自信をもって言うこ  
とが出来ない。このことは特にお断りして置  
きたい。

一体に小説という言葉は、すでに新しい言  
葉なので、はじめは読本（よみほん）とか草  
双紙（くさぞうし）とか呼ばれていたもので  
ある。が、それが改ったのは戊辰（ぼしん）  
の革命以後のことである。

その頃はすべてが改った。言い換えれば、  
悉（ことごと）く旧物を捨てて新らしきを求  
め出した時代である。『膝栗毛』や『金の草  
鞋（わらじ）』よりも、仮名垣魯文（かなが  
きろぶん）の『西洋道中膝栗毛』や『安愚楽  
鍋』などが持（も）て囃（はや）されたので

ある。草双紙の挿絵（さしえ）を例にとって言えば、『金花七変化』の鍋島猫騒動（なべしまねこそうどう）の小森半之丞に、トンビ合羽（がっぱ）を着せたり、靴をはかせたりしている。そういうふうになければ、読者に投ずることが出来なかったのである。そうしてさまざまに新しさを追ったものの、時流には抗し難く、『釈迦八相記』（倭（やまと）文庫）『室町源氏』なども、ついにはかえり見られなくなってしまった。

戯作者（げさくしゃ）の殿（しんが）りとして、仮名垣魯文と、後に新聞記者になった山々亭有人（さんさんていありんど）（条野採菊（じょうのさいぎく））に指を屈しなければならない。魯文は、『仮名読新聞』によって目醒（めざ）ましい活躍をした人で、また猫々道人（みようみようどうじん）とも言ったりした。芸妓を猫といい出したのも、魯文がはじめである。魯文は後に『仮名読新聞』というものを創設した。それは非常に時

流に投じたものであった。つづいて前田夏繁（まえだ なつしげ）が、香雪という雅号で、つづきものを、『やまと新聞』のはじめに盛んに書き出した。

その頃は作者の外に投書家というものがあって、各新聞に原稿を投じていた。彼らのなかから、注目すべき人が出た。『読売』では中坂まときの時分に、若菜貞爾（胡蝶園）という人が出て小説を書いたが、この人は第十二小区（いまの日本橋馬喰町）ばかりで

う）の書記をしていた人であった。その他投書家でもよいものは作者と同じように、原稿料をとっていたように記憶する。（斎藤緑雨（さいとうりよくう）なども、この若菜貞爾にひきたてられて、『報知』に入っただものである。）

これらの人々によって、その当時演芸道の復活を見たことは、また忘れることの出来ない事実である。旧物に対する蔑視（べっし）と、新らしき物に対する憧憬とが、前述のよ

うに烈（はげ）しかったその当時は、役者は  
 勿論のこと、三味線を手にしてさえも、科人  
 （とがにん）のように人々から蔑（おと）し  
 められたものであった。それ故、演芸に関し  
 た事柄などは、新聞にはちよっぴりとも書か  
 れなかった。そうした時代に、浮川福平は都  
 々逸（どどいつ）の新作を矢継早（やつぎば  
 や）に発表し、また仮名垣魯文の如きは、そ  
 の新聞の殆（ほと）んど半頁を、大胆にも芝  
 居の記事で埋めて、演芸を復活させようとつ  
 とめた。

そのうち、かの『雪中梅（せっちゅうばい  
 』の作者末広鉄腸（すえひろてっちよう）が  
 『朝日新聞』に書いた。また服部誠一翁がい  
 ろいろなものを書いた。寛（ひろし）（総生  
 （ふそう））は寛でさまざまなもの、例えば  
 秘伝の類、芸妓になる心得とか地獄を買う  
 田地だとかいうようなものを書いて一しきり  
 は流行（はや）ったものである。

読物はこの頃になっては、ずっと新しくな

っていて、丁髷（ちょんまげ）の人物にも洋傘やはやり合羽（がっぱ）を着せなければ、人々がかえり見ないというふうだった。二代目左団次が舞台でモヘルの着物をつけたり、洋傘をさしたりなどしたのもこの頃のことである。が、作は随分沢山出たが、傑作は殆んどなかった。その折に出たのが、坪内逍遙（つぼうちしようよう）氏の『書生氣質（しよせい かたぎ）』であつた。この書物はいままでの書物とはくらべものにならぬ優れたもので、さかんに売れたものである。

版にしないものはいろいろあつたが、出たものには山田美妙斎（やまだびみようさい）が編輯していた『都の花』があつた。その他硯友社（けんゆうしゃ）一派の『文庫』が出ていた。

劇評では六二連（ろくにれん）の富田砂燕（とみたさえん）という人がいた。この人の前には梅素玄魚（ばいそげん）という人がいた。後にこの人は楽屋白粉（がくやおしろい）というものを

つくって売り出すような事をしたものである。話が前後したが、成島柳北（なるしまりゅうほく）の『柳橋新誌（りゅうきょうしんし）』の第二篇は、明治七年に出た。これは柳暗（りゅうあん）のことを書いたものである。その他に『東京新繁昌記（とうきょうしんは）んじょうき』も出た。新しい西欧文明を取り入れ出した東京の姿を書いたもので、馬車だとか煉瓦だとかが現われ出した頃のこと。書かれてある。これはかの寺門静軒（てらかどせいけん）の『江戸繁昌記（えどはんじょうき）』にならって書かれたものである。一体にこの頃のは、話は面白かったが読んで味（あじわ）いかなかった。



明治十三、四年の頃、西鶴の古本を得てから、私は湯島に転居し、『都の花』が出た頃紅葉君、露伴君に私は西鶴の古本を見せた。

西鶴は俳諧師で、三十八の歳延宝（えんぽ）

う）八年の頃、一日に四千句詠じたことがある。貞享（じょうきょう）元年に二万三千五百句を一日一夜のうちによんだ。これは才磨という人が、一日一万句を江戸でよんだことに對抗したものであった。散文を書いたのは天和（てんな）二年四十二歳の時で、『一代男』がそれである。

幸い私は西鶴の著書があったので、それを紅葉、露伴、中西梅花（なかにしばいか）（この人は新体詩なるものを最初に創り、『梅花詩集』という本をあらわした記念さるべき人である。後、不幸にも狂人になった）、内田魯庵（うちだろあん）（その頃は花の屋）、石橋忍月（いしばしにんげつ）、依田百川（よだひやくせん）などの諸君に、それを見せることが出来たのである。

西鶴は私の四大恩人の一人であるが、私が西鶴を発見したことに關聯してお話したいのは、福沢先生の本のことである。福沢先生の本によって、十二、三歳の頃、私ははじめ

て新らしい西欧の文明を知った。私の家は商家だったが、旧家だったため、草双紙、読本の通人（つうじん）たちの作ったもの、一九（いっく）、京伝（きょうでん）、三馬（さんば）、馬琴（ばきん）、種彦（たねひこ）、烏亭焉馬（うていえんば）などの本が沢山にあった。特に京伝の『骨董集（こつとうしゅう）』は、立派な考証学で、決して孫引（まごびき）きのないもので、専（もっぱ）ら『一

代男』『一代女』古俳諧等の書から直接に材料をとって来たものであった。この『骨董集』を讀んでいるうちに、福沢先生の『西洋旅案内』『学問のすゝめ』『かたわ娘』によって西洋の文明を示されたのである。（この『かたわ娘』は古い従来の風俗を嘲（わら）つたもので、それに対抗して万亭応賀（まんていおうが）は『当世利口女』を書いた。が私には『当世利口女』はつまらなく『かたわ娘』が面白かったものである。）

新らしい文明をかくして福沢先生によって  
 学んだが、『骨董集』を読んだために、西鶴  
 が読んでみたくなり出した。が、その頃でも  
 古本が少なかったもので、なかなか手には入  
 らなかった。私の知っていた酒井藤兵衛とい  
 う古本屋には、山のようにつぶす古本があっ  
 たものである。何せ明治十五、六年の頃は、  
 古本をつぶしてしまふ頃だった。私はその本  
 屋をはじめ、小川町の「三久」、浜町の「京  
 常」、池（いけ）の端（はた）の「バイブル」、

駒形の「小林文七」「鳥吉」などから頻（し  
 き）りに西鶴の古本を漁（あさ）り集めた。  
 （この「鳥吉」は、芝居の本を多く扱ってい  
 たが、関根只誠（せきねしせい）氏がどうい  
 う都合かで売払った本を沢山私のところにも  
 って来てくれたものである。）中川德基が、  
 昔の研究はまず地理から始めなければならぬ  
 といつて『紫（むらさき）の一本（ひと）もと  
 』『江戸咄（えどばなし）』『江戸雀（えど  
 すずめ）』『江戸真砂（えどまさご）六十帖

『などという書物や、古絵図類を集めていたのもこの頃であつた。

西鶴の本は沢山集つた。それらを私は幸田中西、尾崎の諸君に手柄顔（てがらがお）をして見せたものであつた。

そうして西鶴を研究し出した諸君によつて西鶴調なるものが復活したのである。これは山田美妙斎などによつて提唱された言文一致体（げんぶんいっちたい）の文章に対する反抗となつたものであつて、特に露伴君の文章

などは、大いに世を動かしたものであつた。

内田魯庵君の著『きのふけふ』（博文館発行）の中に、この頃の私のことは書いてあるから、私の口から申すのはこれくらいで差控えて置きたいと思う。

私も愛鶴軒（あいかくけん）と言つて『読売新聞』に投書していたが、あまり続けて書かなかつた。（私は世の中がめんどろになつて、愛鶴軒という雅号なども捨ててしまった。そして幸田君にわけを話すと、幸田君は――

愛鶴軒は歿（ぼつ）したり――と新聞に書いてくれた。その後、中西君も『読売』に入社し、西鶴の口調で盛んに小説を書いた。その前、饗庭篁村（あえばこうそん）氏がさかんに八文字屋（はちもんじや）で書かれ、また幸堂得知（こうどうとくち）氏などが洒落文を書かれたものである。純粹に西鶴風なものとは誰も書かなかったが、誰からともなく西鶴が世の中に芽をふいたのである。



私は元来小説よりも、新らしい事実が好きだった。ここに言う新らしいとは、珍らしいということである。西鶴の本は、かつて聞いたことのない珍らしいもので満ちていた。赤裸々に自然を書いたからである。人間そのものを書いたからである。ただ人間そのものを書いたきりで、何とも決めていないところに西鶴の妙味がある。これは俳諧の力から来たものである。

私は福沢先生によって新らしい文明を知り

京伝から骨董のテエストを得、西鶴によって人間を知ることが出来た。いま一つは一休禅師（いっきゅうぜんじ）の『一休骸骨（がいこつ）』『一休草紙』などによって、宗教を知り始めたことである。そして無宗教を知り――無というよりも空、即ち昨日は無、明日は空、ただ現在に生き、趣味に生きる者である――故にバラモン教からも、マホメット教からも、何からも同一の感じをもつことが出来るようになった。

私は江戸の追憶者として見られているが、私は江戸の改革を経て来た時代に生きて来た者である。新しくなっ行って行きつつあった日本文明の中で生きて来た者であって、西欧の文明に対して、打（う）ち克（か）ち難い憧憬をもっていた者である。私は実に、漢文よりはさきに横文字を習った。実はごく若い頃はあちらの文明に憧（あこが）れたあまり、アメリカへ帰化したいと願っていたことがある。アメリカへ行くと、日本のことを皆から聞か

れるだろうと思つたものだ。そこで、実は日本のことを研究し出したのである。私の日本文学の研究の動機の一つは、まったくそこにあつたのである。

二十二、三歳の頃――明治十三、四年頃――湯島へ移り、図書館で読書している間に、草双紙を読み、『燕石十種（えんせきじっしゅ）』（六十冊）――これは達磨屋吾一が江戸橋の古本屋で写生して、東紫（後で聞けば関根只誠氏）に贈つたものであつた。――を

読み、毎日々々通つて写本した。その頃石橋思案（いしばししあん）、幸田成行（こうだしげゆき）の諸君と知己になつたのである。私は明治二十二年頃、一切の書物から離れてしまつたが、それまでには、私の口からこんなことを申すのは口幅広（くちはばった）いことのようなのであるが、浮世草紙の類は、一万巻は読んでいると思う。この頃『一代男』を一円で買ったものであるが、今日でも千円はしている。思えば私は安く学問をしたもので

ある。

黒髪をあだには白くなしはせじ、わがたら  
ちねの撫でたまひしを、という愚詠をしたが  
今白髪となって何の功もないことを恥じてい  
る。

（大正十四年三月『早稲田文学』二二九号）

底本：「梵雲庵雑話」岩波文庫、岩波書店

1999（平成11）年8月18日第

1刷発行

※「六二連」は第1刷では「二六連」となっ  
ていました。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2003年2月9日作成

2003年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫（<http://www.aozora>）

r a . g r . j p / 〱 で作られました。入力  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの  
皆さんです。

### ●表記について

・ このファイルは W 3 C 勧告  
X H T M L 1 . 1 にそった形式で作成さ  
れています。

辺境文庫にて P D F 製本

2 0 0 7 年 7 月 2 0 日 作成